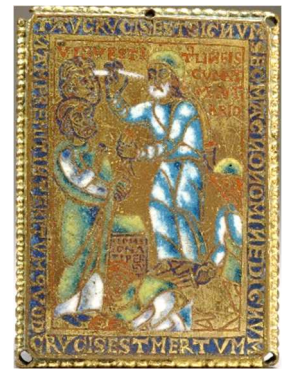




Straet, Jan van der

エゼキエルが神の顕現の幻を最初に示されたのはヨヤキン王の治世 5 年 4 月でした。神の栄光が輝くさまに茫然となり、イスラエルを反逆の民として裁くとの神の強い御心に怒りを覚え、その裁きを民に伝えよという召しを受け止めきれず、悶々と 1 年 2 ヶ月の間を過ごしました。その間、エゼキエルは霊に導かれ、エルサレム神殿や祭司の務め、偶像礼拝する都の民の幻を見ます。滅亡の日が刻々と近づいてきています。エゼキエルはとうとう、ヨヤキン王の治世 6 年 6 月、即ち捕囚となって 6 年目に、自分の家でユダの長老たちを目の前にして、全てを告白して、聞かせました。

まず、栄光に光り輝く顕現した主が、「霊」にエゼキエルを故国エルサレムに連れて行かせ、神殿の北側での墮落した偶像礼拝の様子を見せます。偶像、祭壇が置かれ、その前で密かに礼拝する 70 人も長老たち、タンムズ神のために泣く女たち、神殿の中でさえ太陽を拝む人々。「霊」は怒り、この都を罰するために 6 人の男を送ります。この中で、亜麻布をまとい、筆を持った一人に、偶像礼拝を嘆き悲しむ人々の額に印をつけさせます。それ以外の老人も若者も、おとめも子供も人妻も、殺して、滅ぼし尽くせと命じます。エゼキエルは助けを求めますが「彼らの行いの報いを、彼らの頭上に帰する」との答えでした。亜麻布をまとった者は **わたしはあなたが命じられたとおりにいたしました(9:11)** と命令を遂行したと報告します。滅ぼされない人々が残されたということです。



再び主が顕現し、ケルビムと共に神殿の南側に留まり、亜麻布をまとった者にケルビムの間にある「燃える炭火」を、都の上にまき散らせと命じます。火を両手に置き、**その人は火を受け取って、出て行った(10:7)**とあります。炭火(愛の裁き)や亜麻布(死者、天使の衣)が、主イエスを予感させるイメージです。その後、亜麻布をまとった人はエゼキエル書に現れないのも不思議です。主の栄光が庭を満たし、神殿は雲で満たされる様子をはっきりと見せ、東の門の上、高く留まりました。

「霊」は神殿の東側の門にエゼキエルを運び、民の指導者が、25 人の男たちと「都は鍋で我々は肉」、つまり都が我々を守ってくれると話している様子を見せます。剣を恐れ、籠城しているのです。しかし「霊」は指導者を剣で打ちます。エゼキエルは嘆き、倒れ伏します。日本人ならば、「神も仏も無いものか」と絶望せざるを得ない最悪の時になって、**そのとき、お前たちは、私が主であることを知るようになる(11:10・12)** とエゼキエルは知らされます。

捕囚となり、故国を遠く離れ、望郷の思いは深いでしょう。同時に故国の窮状は伝えられています。神はイスラエルが滅ぼし尽くされるといふ預言を語れと言われます。エゼキエルにとって、これほど苦しく、辛いことはないでしょう。けれども、捕囚の民が遠く離れたバビロンでささやかな聖所を持っていることを主は認め、**わたしは彼らに一つの心を与え、彼らの中に新しい霊を授ける。わたしは彼らの肉から石の心を除き、肉の心を与える。彼らがわたしの掟に従って歩み、わたしの法を守り行うためである。こうして、彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。(11:19)** とエゼキエルを励ますのです。

翼を広げて仕えるケルビムや車輪と共に、主の栄光は都を出て、都の東にある山の上にとどまったとあり、主が都を離れていったと記しています。また、エルサレムまでエゼキエルを連れて行き、様々なものを見せた使者である「霊」はエゼキエルを捕囚の民のもとへ連れ戻します。そして、「幻」はエゼキエルを離れて上っていきました。エゼキエルは霊の導きのままに、語ったのです。